

国際サーカス村通信 Vol.21 No.07	2017年 8月 10日 (木)
	文責 西田 敬一
編集 NPO 法人国際サーカス村協会	〒376-0303 群馬県みどり市東町座間 41-1
Tel 0277-70-5010 Fax 0277-97-3688 http://www.circus-mura.net k-nishida@accircus.com	

●サーカス公演の新たな道 (西田 敬一)

サーカス学校開校 16 年目後期になる、今年 3 月から 7 月のあいだ、サーカス学校は大きな公演を幾つか行うことができた。

3 月 19 日、栃木県笠間市で行われたお祭り“稲荷町アートサーカス”に参加したのを皮切りに、4 月 1、2 日には島根県雲南市の“さくら祭り”へ、5 月 3 日は足立区のギャラクシティ、7 月 8、9 日には、今年 6 回目になる埼玉県富士見市キラリ☆ふじみの“サーカス・バザール”、そして 7 月 15、16 日の発表会を終え、7 月 22 日に練馬文化センターの“森と劇場のサーカスフェスタ”を大成功に終え、さらに 8 月 4 日、今年 2 年目となる長野県佐久市で行われた“キッズ・サーキット IN SAKU 2017”に参加。

これらギャラクシティ、“サーカス・バザール”、“劇場と森のサーカスフェスタ”、“キッズ・サーキット IN SAKU”では、サーカス学校生徒全員に加えて卒業生数名が参加した公演を行うことができた。このほかにも、地元のお祭りやイベントに生徒数名で参加したものも多く、とにかく忙しい半年間であった。

こうした公演が、生徒たちがその技術を磨いていくいい機会であるのはいままでの間でもないが、今回はそのほかにも、いくつかのテーマにチャレンジした。そのひとつは、主に野外で行う公演のための舞台作りである。

笠間市の公演場所は小さな神社の境内で、そこを下見した時に、背景に紅白幕をぶら下げるといった手もあるなと思ったものの、地面にシートを敷き、その上に円形のカーペットを置き、背景に開閉幕を用意して、さらにその左右にパネルを立て、簡単な野外舞台のようなものを作れたら面白いのではないかと思いついた。僕の頭のなかで、これまでの公演で使ったものや、今は眠っている大道具や小道具があれこれ浮かんでは消えていた。

それにもう一つ、僕のなかでは、簡単に設営できる野外舞台のイメージは“サーカスはリヤカーに乗って”のリヤカーと重なってきているのだ。僕の頭の片隅には、今もリヤカーを引いて、あの町この街を通り過ぎていくイメージがゆらゆらと燃えているものの、右足首を軟固定するためにコルセットをつけている身となってしまったので、リヤカーを引いていくことはただの夢として諦めなければならなくなっている。リヤカー一台がポツンと置かれていて、その前でパフォーマンスが行われているというイメージはかなり強烈で、これを超える絵を描くのは難しいのだが、移動可能で立てたり壊したりできる野外舞台ができれば、それがリヤカーの代わりにはならなくても、そこから新しい野外公演のあり方を創造していくことができるのではないかと思ったのである。

早速、“稲荷町アートサーカス”で、この試みを試してみる。円形のカーペットを敷くところまではできなかったが、後はイメージ通りの野外舞台を設置できた。しかも両サイドのパネルには、このアートサーカスのメインイベントである古着を使った顔作りの作品を数点貼りつけることで、ただの黒パネルよりも楽しい両サイドができあがった。

この野外ステージは、その後、室内公演でも生かすことができ、練馬文化センターの“森と劇場のサーカスフェスタ”の“森”のなかの野外舞台では、円形のカーペットも敷くことができ、かなりの出来栄となったのではないかと思う。



↑写真右；『森と劇場のサーカスフェスタ』野外舞台にて大道芸を披露する中村篤史君

写真左；『キッズサーキット in SAKU』にて玉乗りフラフープキャッチをする中村篤史君と高橋宏季君

今後、さらに手を加え、サーカス村の野外舞台として定着させることができれば面白いのではないかと思っている。

もちろん、特別変わった野外舞台というよりも、誰もが思いつく程度の野外舞台だし、例えば丸太や鉄パイプで組む芝居小屋に比較するような規模のものでもない。ましてやサーカス大テントとは比較しようがないほどちっぽけなものだが、「隗より始めよ」ではないが、ここでひとつできれば次にはさらに良いものを作れるかもしれないではないか。

もうひとつ、この半期の仕事で、大きな成果を得たのは、富士見市民文化会館“キラリ☆ふじみ”のメインホールで公演した『楽団と道化師』公演である。この公演については、作・演出の辻卓也氏が演出ノートを書いているので、そちらを読んでもらいたいが、単なる娯楽作品になりがちなサーカスショーをつくるのではなく、現代という時代に目を向けた創作作品を作り出すことができた点で、画期的な出来栄えだったのではないかと感じる。大熊ワタル氏とジンタラムータの面々、クラウンふくろこうじ氏、そして参加パフォーマーはじめ、舞台関係者全ての協力があったことだが、この新しいサーカスショー作りを今後どのように続けていくか。これはとても大きな課題だと思うし、続けていきたいものである。

サーカスは、大衆を熱狂させる文化として高く評価され、総合芸術の一つとしての可能性が追求された時代もあったが、残念ながら、その総合芸術として評価されたサーカス作品を、僕は寡聞にして知らない。サーカスに総合芸術として可能性を見ること、あるいは、そのようにサーカスを評価することはむしろ間違いではないかとさえ思えるのだが、いかがであろうか。ここは、一度、素直に訓練に訓練を重ね、とことん追求された身体表現のひとつとして、サーカス技を認知しておくほうがいいのではないかと感じる。その訓練された身体にどのような考え、思想が宿っているかは全く別問題とした上で、ある考えのもとに、つまり娯楽作品ではない、サーカスショーを創作することこそ思考すべきだと改めて考えていきたいものである。世界には、そんな作品がすでにあることを念頭におきながら。

→通信を保存していらっしゃる方は、「Vol. 21 No. 04」（2017年3月13日発行）掲載の『サーカス・シルクールの新作』（大野洋子）をいまいちどお読みいただければ幸いです。

● サーカス学校 17年目へ

サーカス学校 17年目は、9月11日（月）から始まります。去る7月にフラフープの中村篤史君が卒業したので、今年度は6名でのスタートになります。10月には2ヶ月間の予定で男性がひとり練習にくることになっていますが、現在のところ、入学希望者はいません。このままでは、今以上に学校経営が難しくなるので、ひとりでもふたりでも、生徒が増えてくれることを願いつつ、生徒募集に努力しなくてはなりません。

ご協力のほど、宜しくお願いします。

★☆☆ サーカス学校 17年度前期発表会 開催のお知らせ ☆☆☆

2017年12月16日（土）と17日（日） 時間未定。決まり次第ご案内いたします。

会場；沢入国際サーカス学校 体育館 〒376-0301 群馬県みどり市東町沢入 491

電車でお越しの方 最寄り駅；わたらせ渓谷鉄道「沢入（そうり）」駅下車、徒歩10分

*打ち上げご参加ご希望の方、宿泊をご希望の方は、あらかじめ西田までご連絡いただきますようお願いいたします。

TEL.090-3008-7738 もしくは メール k-nishida@accircus.com まで

● 今年のサーカス・バザールの舞台サーカス『楽団と道化師』について (辻 卓也)

『Power to the people』というあの有名な歌に、私が初めてリアリティを感じたのは、2011年4月10日の高円寺である。その年の3月11日に東日本大震災が起きて、多くの街が津波に飲まれ、福島第一原子力発電所が爆発。出張先のテレビ情報だけの呑気な私に、チェルノブイリを経験している欧州の友人たちから、最初に深刻な原発の状況と私の安否を尋ねられ、その後、テレビでは報道されないような原発や放射能の情報が、少しずつ国内外のインターネットサイトで出回り始めた。その危険な全貌や原子力利権の概要が、一般の人にも明らかになりはじめた頃、高円寺の素人の乱が「原発やめろデモ」を企画し、私もそれに参加した。それまでデモに参加したことは1回しかなく、チェルノブイリの時に小学生だった私は、3.11以降になって、原発とは何であるかを初めてちゃんと理解しようとしていた。

このデモは、主催者や警察の想定をはるかに超えた15,000人が集まった。デモ隊が車道何車線にも膨れ上がった本来のデモらしい姿をしたデモは、この時以来、残念ながら徹底的に人々を管理するこの国では見ることがない。DJブースを搭載したサウンドカー、チンドン部隊、ドラム隊、バンドが生演奏をするトラックなどが出動し、なんとも魑魅魍魎なエネルギーに溢れ、盛り上がったデモであった。あの6年前の心情と景色はよく覚えている。原発の危険性を学ぶことなく、それにあぐらをかいて生きていたこと、これほどの利権と差別にまみれた社会の中で生活してきたこと、それを許してきた自らの無知に対する怒りと戸惑いが入り交ざったような、真剣な気持ちで参加していた人が多かったように思う。私にとっては「この胸が詰まる気持ちは自分だけではないのだ」と感じた連体感などを、今でも思い出せる日だった。

そのデモのスタート地点となった公園では、クラリネット奏者の大熊ワタル率いる“ジンタラムータ”がライブ演奏を行っていた。その演奏に背中を押され、デモ隊は出発する。ビクトル・ハラ『平和に生きる権利』を始め、数々のプロテストソングが高円寺の空に響き渡っていた。彼らの演奏に、聞き入り、勇気付けられる人々。私は何かこみ上げてくるものすら感じたのをよく覚えている。この演奏を聞いて初めて、中学生の時に聞いたジョン・レノンの「人民に力を」の意味を理解したのだ、と思った。



その大熊さんたちに、サーカス・バザールの舞台サーカス公演に出演してもらうことが昨年の年末に決まった。いうまでもなく気負った私は、構成台本を書くのに苦勞するのだが、それでも、クラウンとして番組を繋げてもらうふくろうじさんの映像を繰り返しみて、ジンタラムータの曲を当てはめるところから始める。その他の出演者には、空中リングの愛実、マジックのIzuma、ローラー・ボーラー・バランス

のケンタ、ハンド・トゥ・ハンドとクイック・チェンジの Duo AB、シルホイールのナオキ、といった面々。基本的に曲はジンタらムータの『Dies Irae／怒りの日』というアルバムから選ぶことにする。

Dies Irae というのはグレゴリオ聖歌のレクイエム、神の審判を歌った曲で、このアルバムのタイトルとなった怒りの曲は、ケンタのローラー・ボーラー・バランスと合わせる。クレズマーの名曲『生き生きとしあわせに』は最後の演目として考えていたクイック・チェンジ、最初は早いテンポの曲に合わせてクイック・チェンジを演じるのは大変だし、難色を示していた Duo AB に頼み込んで作品を作り変えてもらった。

もともとジンタらムータのレパトリーではない曲もある。ショウのなかでバラの花を使って番組をつなげていくことは決めていたので、マジックの Izuma さんの曲は、ピート・シガーの反戦歌『花はどこへ行った』をアレンジして演奏してもらうことにした。この曲には思い出があって、東ドイツ出身の有名なフィギュアスケートの女性選手が、リレハンメルオリンピックで内戦で苦しんでいるサラエヴォの平和を祈って、この曲を選んでフリーの演技をしていた。アスリートがオリンピックの本番で、自らの思いを堂々と主張する姿は眩しく見えた。

愛実さんの空中リングはレ・ミゼラブルでおなじみの『民衆の歌』。安保法案に反対する高校生たちが国会前で合唱して、一部で話題になった曲である。ジンタらムータのこぐれみわぞうさんにライブで歌ってもらうことになった。それら、サーカス番組用の曲に加えて、念願の『平和に生きる権利』の単独演奏もジンタらムータにお願いした。ビクトル・ハラは 1970 年前後のチリのヌエバ・カンシオン（新しい運動：音楽を通じた社会変革運動）の旗手で、貧しい人々や、社会の不正や矛盾を多く歌いあげたチリの伝説的な歌手だったが、アジェンデ政権を転覆させたピノチェトの軍事クーデターの時に虐殺された。音源を使った演目になったシルホイールは、そのハラスのギターと優しい歌声で、貧しい子供を歌った「Luchin」という曲を選ぶ。アクロバットの技術を見せる、という大きな前提があるサーカス芸の中で、幼少期の感情や記憶をイメージした作品が作れないだろうか、と、直輝くんといろいろ話し合いながら、作品を作ってもらった。

登場する曲のほとんどがプロテストソングというサーカスになった。二日間の合宿と二日間の劇場リハーサルだけで、楽団の演奏と演技を合わせてショウを作るという、毎年かなり短期間の忙しい作品作りのサーカス・バザールのサーカス舞台ではあるが、ジンタらムータの皆さん、サーカスの出演者、スタッフさんたち皆のおかげで、なんとか作品としてまとめ上げることができたと思う。もちろん、舞台空間の切り方、演目の選び方、作品構成の工夫など、私が至らなかった反省点や課題となることはたくさんあった。この反省は今後活かせるようにしなくてはいけないと思う。

昨年サーカス・バザールでは、戦争が登場する中原中也の「空中ブランコ」や、ある種の暴力的な理不尽さを作品に取り入れられないかと試行錯誤をしてみた。今回は、プロテストソングと共にサーカスをみせる、というストレートな試みだったと思う。「パンとサーカス」という言葉に代表されるように、サーカスは古くから大衆の娯楽として皮肉な捉えられ方をされることもあれば、多様性に富んだ詩的な世界

の象徴として捉えられることもあったと思う。最近はコンテンポラリーなパフォーマンスアートとして捉える人も急速に増えてきている。もちろん、それはどれも素晴らしいと思う一方で、社会が抱えている矛盾や不公平、様々な問題を、もう少しサーカスと繋げられるような作品が作れたら良いと思う。

←「サーカス・バザール」の舞台サーカス公演のワンシーン



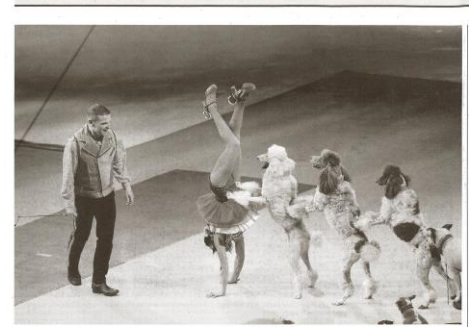
●会員様よりお手紙 (井上 美一様)

那須は毎日のように梅雨寒の日が続いていましたが、本日は梅雨の晴れ間が広がり暑くなっています。毎回サーカス村からの通信を楽しく拝見しております。

サーカスに携わった者は、今回のリングリングサーカスの出来事は複雑な思いで受け止めたことと思います。事実サーカスを離れすでに25年以上たっているにもかかわらず、当時大阪でリングリングサーカスの裏側に招待いただき見たサーカスらしい別の世界や、その後の交流でキグレに来ていただいた芸人さんが鮮やかに思い出されました。その当時このようなことが起こるなどということ誰が予想できたでしょうか？

テレビがない我が家でこの事実を知ったのは英字新聞からでした。日本の多くの新聞はあまりこう行った事、特に動物や自然科学に関することに大きく紙面を割いてくれません。英字新聞では一面に猛獣ショーの写真、中面の半分を割いて報道していました。ゾウのショーを辞めてしまってから経営が行き詰まって来たのが大きな原因とありましたが、サーカスだから、個人の持ち物だから飼っている動物に対しどのようなことをしてもいいという時代はとうの昔に終わってしまいました。もし早い時期に繁殖場を設け自園で繁殖したゾウを使い、なおかつゾウとの深い関わりが文化として残っている東南アジアの諸国と連携し、ゾウに対する訓練がいかに必要かという教育的な活動を果たしていたらこのようなことにならなかったかもしれません。それもこれも独占的に利益を享受して来た結果とも言えます。このことは動物に関わるすべての人、団体に言えます。どんな種類の一頭一頭にも個性があり、生存権があり、なおかつ尊敬される存在であるということを知らなければなりません。また、動物たちだけではなくそれと関わる方々もたくさんいたでしょうから、そういった人間的(動物の扱いやサーカスという世界で働くということ)問題も、何か社会的な倫理などに反したものもあったのかもしれませんが。

西田さんが自ら身を粉にしてサーカス文化を深く語ってくださることにいつもいつも感謝し、頭が下がります。例えどんな側面を持っていたとしてもサーカスはサーカスなのです。今まで関わって来た多くの芸人が舞台上で流して来た血や汗の歴史です。途絶えてしまうことには私のようなちょっとだけサーカスで過ごした人間でさえも、非常に残念です。現在日本でも世界的な影響を受け、動物ショーが無いサーカスを提唱して活動をしている団体もあります。私は古い人間でなおかつ動物園のない地域で生まれ育ったので、サーカスで見た動物たちやアニマルトレーナーに深く感動したのですが、ここでも時代の流れを感じずにいられません。動物たちに無理やり芸をさせる=サーカスという考え方はあまりにも単純で、純粋に賛成するということではできません。サーカス以外で、サーカスの動物たちと係わったことがない人には無意味かもしれませんが、皆動物を仲間と思ひ質の違いや十分ではないかもしれませんが、愛していたと信じています。ともすれば日本の文化が脅かされることになるかもしれませんが、どうぞサーカスが文化として残っていただけますようにご活躍下さい。いつかサーカス学校の発表会を見に行きたいと思っていますが、毎日の生活に追われ思うように行きません。幸い今勤めていますホテルが経営者の交代で8月末で営業終了という話が出ています。もちろんすぐ仕事を見つけなくてはと思っていますが、その前に時間を作っていけたらいいなと思っています。今回の通信で西田さんが描いた伝統芸が引き継がれますように。私としては坂綱や碎け梯子が入っていないのがちょっと残念でしたが、サーカスは表に出ている演者も重要ですが、後見の芸というものも存在してサーカスと私は考えています。立派な後見を育てるのも重要な仕事で



Animal trainers Hans and Mary Klauer perform during the last show of the Ringling Bros. and Barnum & Bailey circus at Nassau Coliseum in Oyster Bay, New York, on Sunday. (AP Photo)

Ringling Bros. performs last show under the big top after storied run

With laughter, hugs and tears—and the requisite death-defying stunts—the Ringling Bros. and Barnum & Bailey Circus revived its final Sunday evening Sunday night as performed in last show.

We are, however, the Greatest Show on Earth," boomed Sebastian Lee Bennett, who has been the ringmaster since 1999. His son, who also performed, stood by his side. The show was held at the Nassau County Coliseum in Oyster Bay, New York, about 40 km (25 miles) east of New York City. It was an emotional 2½ hours for those

"The animals, this is where we fell in love with them," she said. "We got to see animals here and the Bronx Zoo. We don't get on safari."

Historic as she watched the final big act act with its leopards, tigers and Alexander Gray, the handsome animal trainer.

"I've always had a crush on the lion tamer," she said, laughing through tears.

But it was those animal shows that led to the circus' eventual demise.

Over the years, animal rights activists had targeted Ringling, saying that keeping animals throughout the country amounted to abuse. In May 2016, the company removed elephants from its shows.

Feld family continued to manage the shows. The Felds brought the circus back in 1982.

Earlier Sunday a group of retired and former circus performers sat across the street at a hotel bar, laughing and laughing and sharing memories of hours past.

"There's a lot of mixed emotions, said Ben George," Jerry Hogan, Ringling's circus chairman. "It's a transition, but it's bittersweet. I'm seeing people I haven't seen in years."

Once a mainstay of entertainment in small towns and big cities across the country, Ringling had two touring circuses this season, one of which ended its run earlier this month in Providence, Rhode Island. That show was the more traditional, three-ring circus, while

↑ "the japan times" (2017年5月23日) より

す。なかなかリングリングサーカスの話題を共有できる人がなく手紙を書いてしまいました。古い時代を知っている芸人さんたちが死んでしまう前に一つでも多くの芸が伝承されますことを祈っています。お体に気をつけご活躍下さい。

サーカス公演情報

★木下大サーカス
<ul style="list-style-type: none"> ●熊本公演 公演期間 2017年9月15日(金)～2017年11月29日(水) ●休演日 毎週木曜日と9/20、10/18、11/15、11/22。ただし11/23(木祝)は開演。 ●会場 イオンモール熊本 特設会場(熊本県上益城郡嘉島町) ●電話 熊本公演事務局 TEL096-362-0045 (9/10迄)・TEL096-237-0405 (9/11から) ●ウェブサイト http://www.kinoshita-circus.co.jp/
★ポップサーカス
<ul style="list-style-type: none"> ●仙台公演 公演期間 2017年9月16日(土)～2017年11月26日(日) ●休演日 毎週水曜日と10/5、10/12、11/9。ただし10/11(水)は開演。 ●会場 仙台港特設大テント(三井アウトレットパーク 仙台港 前) ●電話 仙台公演事務局 TEL022-781-8380 ●ウェブサイト http://www.pop-circus.co.jp/
★ハッピードリームサーカス
<ul style="list-style-type: none"> ●今治公演事務局 7月29日(土)～9月25日(月) ●休演日 毎週水曜日 ●会場 イオンモール今治新都市J駐車場内 大テント特設会場 ●電話;今治公演事務局 TEL0898-52-7501 ●ウェブサイト http://www.dreamcircus.jp/
★ルスツリゾート 『ルスツサマーカーニバルサーカス PARTY PARTY PARTY!!』
<p>今年のルスツのサーカス団は、ロシア、ウクライナより選りすぐりのメンバーが来日。特別編成してお届けするオリジナル・サーカス・ショーです。アクロバティックな空中芸、芸を披露する見事な猫たち、超絶技巧のバランス芸、幕間に登場する滑稽なふたり組、そして最終演目は自由自在に空を飛ぶ、大迫力の空中ブランコ! ※観覧無料。要ご宿泊または入園券。</p> <ul style="list-style-type: none"> ●期間1;2017年7月21日(金)～8月20日(日) ①15:00 ②19:30 ※定休日:毎週水曜日 ●期間2;2017年8月21日(月)～8月26日(土) ①19:30 ※定休日なし。毎日公演。 ●会場 ルスツリゾート サウスウイング山側正面 特設サーカステント ●電話 0136-46-3331 (代表)

その他公演情報

★劇亭さん囃お見舞い 「月夜だ、すっとんぴょん」
<ul style="list-style-type: none"> ① 2017年9月9日(土) 14時/18時 「狸の回」 出演者;ダメじゃん小出&加納真実 ② 2017年9月21日(木)・22日(金) 19時30分 「兎の回」 出演者;シルヴプレ ③2017年9月30日(土) 14時/18時 「貉の回」 出演者;山本光洋
<ul style="list-style-type: none"> ●料金 予約2,500円 当日3,000円 ●会場 あさくさ劇亭 ●ご予約 TEL03-6231-6047
★Takeshi and The Escargots “S-CARGO A GO-GO” エスカルゴ・ア・ゴゴ
<ul style="list-style-type: none"> ●出演者 シルヴプレ/アレックエレジャポネーズ ●チケット取扱 テアトルフォンテ TEL045-805-4000 ●料金 一般;2,000円 フォンテチケット;1,800円 友の会割引;1,600円 学生割引;1,600円 ●日時 2017年11月23日(木祝) 14:00 開演(開場は30分前) ※全席指定、未就学児入場不可 ●会場 横浜市泉区民文化センター テアトルフォンテ ホール

●モンゴルコントーション＝オランノガラルトを広めたい。スタジオ設立より3年目を迎えて（長屋 歩未）

2015年8月に新宿区の自宅近くにスタジオをオープンして、今月で3年目に入りました。

始めはモンゴルのコントーション＝”オランノガラルト”（曲がる芸術）を日本に広めようと、2009年より月に1度の練習会を開いたり、当時サーカス学校の生徒だった目黒有沙さんとイベントを企画したりしているうちに、「コントーションをしっかりと学びたい。毎日稽古をつけてほしい」と志願する奇那人方がポツリポツリと現れ始めたではありませんか。「引き受けるならば、モンゴルのコントーションに倣い、極限の柔らかさを追求してあげなければ」。ちょうどその頃に第一子を妊娠したのもあり、「コントーションを指導する」ということを考え始めました。モンゴルにいた頃、ある指導者は「どんな特徴を持った子どもだとしても、プロのレベルまで柔らかくするよう指導できる」と自信満々に断言していたことがありました。ニューヨークで”CIRCUS WAREHOUSE”というスタジオを経営、空中ブランコ等の指導をしているジーノさんは、「開脚180度だったら、どんなに硬い大人だって8ヶ月あればできるようになる」と言っていたのを聴いていました。ヒトの身体というのは個人差はあれど基本的なつくりは同じはず。20歳を過ぎてから始めた自分が柔らかくなったのだから、ほかのヒトも同様だろうと、まずは自宅のリビングでひとり、ふたりを相手に指導を始めてみたのですが、ことはそう単純ではありませんでした。つまり、コントーションという芸を目指すためには、土台として「健康な身体」のうえに「基礎的な力を持った身体」が絶対に必要なのですが、「やってみたい」と訪ねてくる大人のほとんどにはその両方がないということに気づいたのです。これではウォーミングアップのストレッチレベルで、ケガをしてしまいます。常日ごろより「基礎が大切。何の芸をやるにも基礎的な身体がない」と、口をすっぱくして言っている西田さんやナージャ先生、関口さんのことばが実感できました。それでも、私自身がコントーションを始めするには遅すぎる年齢、下地のない身体だったのにも関わらず受け入れてくださったモンゴルの先生に感謝しているので、興味がある方はどんな方でも受け入れようという気持ちで今後もやっていこうと思います。

また、スタジオを持ってから感じていることのひとつには、指導や自分の練習以外の雑務がとにかく多いということです。こちらも、西田さんがよく「僕は校長というより用務員だ。校内や資料館を掃除している方が多い」と言いながら、いつも身体を忙しく動かしては片付けやゴミ捨てをしているのですが、それがよくわかりました。当スタジオはサーカス学校や資料館の規模ではなく、70平米ほどのささやかな箱なのですが、拭いても拭いても拭ききれず、最低限の掃除しかできていません。

もうひとつ、モンゴルの「オランノガラルト」がちゃんとできる人、モンゴル人のパフォーマーくらいできる人を育てたいということはなかなかできていません。中には「小さい頃にずっとやりたかったのですが、親がやらせてくれませんでした。腰を痛める、危ないからダメといわれました。でも大人になっても諦めきれず、やってみたいと思いはずっとありました。そうしたら日本に来て、大人からでも教えてくれるというので嬉しかったです」というモンゴル人が通ってきてくれたり、「日本に住んでいるモンゴル

人の子どもたちはモンゴルの文化を知らない。モンゴル民族舞踊を教えたい」と場所を探していたモンゴル人女性と出会って使ってもらうことになったり、「オランノガラルトを本場で習いたい」とモンゴルへ渡る日本人が出てきたりしていて、少しはモンゴルへの恩返しになっているのだろうかと感じることがあります。これからは、コントーションを芸としてちゃんとできる日本人が生まれるようなんとか活動を続けていきたいものです。

